

冬どりタマネギ夏育苗中の剪葉は10～18cmで2回までとする					
[要約] 冬どりタマネギ夏育苗中の剪葉は、剪葉程度および処理回数が増えるほど、苗および定植後の生育へ影響し、収量の低下がみられる。そのため、剪葉は10～18cmとし、回数を2回までとすることで、慣行と同等の生育と収量を確保できる。					
上場営農センター・研究部・畑作野菜研究担当				連絡先	0955-82-1930 uwabaeinouenta@pref.saga.lg.jp
部会名	上場営農	専門	栽培	対象	タマネギ

## [背景・ねらい]

上場地域では高収益が期待できる冬どりタマネギの普及が進んでいる。当センターで開発した夏育苗法による栽培では、全自動移植機の利用を前提としている。しかし、盛夏期の温度上昇により苗が軟弱徒長すると倒伏し、病害の発生と機械移植作業性の低下が懸念される。また、全自動移植機を用いるためには移植時に草丈18cm以下である必要がある。そこで、苗質の向上および高収量を得るための、育苗中剪葉程度を明らかにする。

## [成果の内容・特徴]

- 育苗中の剪葉程度は、剪葉後の草丈が短いほど根鉢が形成されにくくなり、10cm・3回および5cm・2回の剪葉では葉数も少なくなる(表1)。
- 苗を手植えした場合の収量は、草丈10cm以上・2回以下の剪葉で慣行と同程度であり、10cm・3回および5cm・2回の剪葉で収量の低下がみられるため、剪葉は10～18cmで2回までが良い(図2)。

## [成果の活用面・留意点]

- 作業労力や雑菌の侵入防止の面から剪葉回数は少ないほうが望ましいが、徒長して倒伏しそうな場合には倒伏する前に必ず剪葉を行う。
- 剪葉は、雑菌の侵入防止のため、昼過ぎまでに終了し、夕方の短日処理開始前までに切り口が乾燥する条件下で行うとともに、薬剤散布も行う。

[ 具体的データ ]

表1 育苗中の剪葉程度が定植時の苗の生育に及ぼす影響

試験年	試験区	葉数 (枚)	葉鞘径 (mm)	地上部重 (gFW)	根重 (gFW)	根鉢形成 指数
2014	剪葉なし	2.2 ab	2.0	1.13	0.03	3.0
	剪葉15cm×1回(慣行)	2.5 a	1.7	0.82	0.05	2.3
	15cm×2回	2.2 b	1.9	0.73	0.06	2.6
	10cm×2回	1.6 c	1.8	0.50	0.04	2.3
	5cm×2回	0.4 d	1.5	0.16	0.03	2.0
2015	剪葉18cm×1回(慣行)	3.2 a	2.5	-	-	-
	15cm×2回	3.2 a	2.9	-	-	-
	15cm×3回	3.2 a	2.3	-	-	-
	10cm×2回	3.2 a	2.7	-	-	-
	10cm×3回	2.7 b	2.0	-	-	-
2016	剪葉18cm×1回(慣行)	2.9 ab	3.2	-	-	-
	18cm×2回	2.9 ab	3.2	-	-	-
	18cm×3回	2.7 b	3.3	-	-	-
	15cm×2回	2.7 ab	3.0	-	-	-
	15cm×3回	3.0 a	3.1	-	-	-
2017	剪葉15cm×1回(慣行)	2.5 a	3.2	2.05	0.39	3.0
	15cm×2回	2.3 a	3.0	1.44	0.30	3.0
	10cm×2回	2.3 a	2.5	1.12	0.14	3.0

※試験区に示す剪葉程度は剪葉後の草丈である

※根鉢形成指数はセルから引き抜いた時の根鉢形成状態を4段階で評価した

0: 根に土の付着無し、1: 土の付着はあるが根鉢が形成されていない、  
2: 根鉢が崩れている、3: 根鉢が形成されている

※2014年のデータに付する 異なるアルファベット間にはTukey-Kramer検定により5%水準で有意差があることを示す (n=10~30)

※2015年~2017年のデータに付する 異なるアルファベット間にはTukey検定により5%水準で有意差があることを示す (2015年:n=60、2016年および2017年:n=30)

※播種日: 2015年7月4日、2015年7月3日、2016年7月1日、2017年6月30日

※調査日: 2014年8月21日、2015年8月25日、2016年8月26日、2017年8月21日

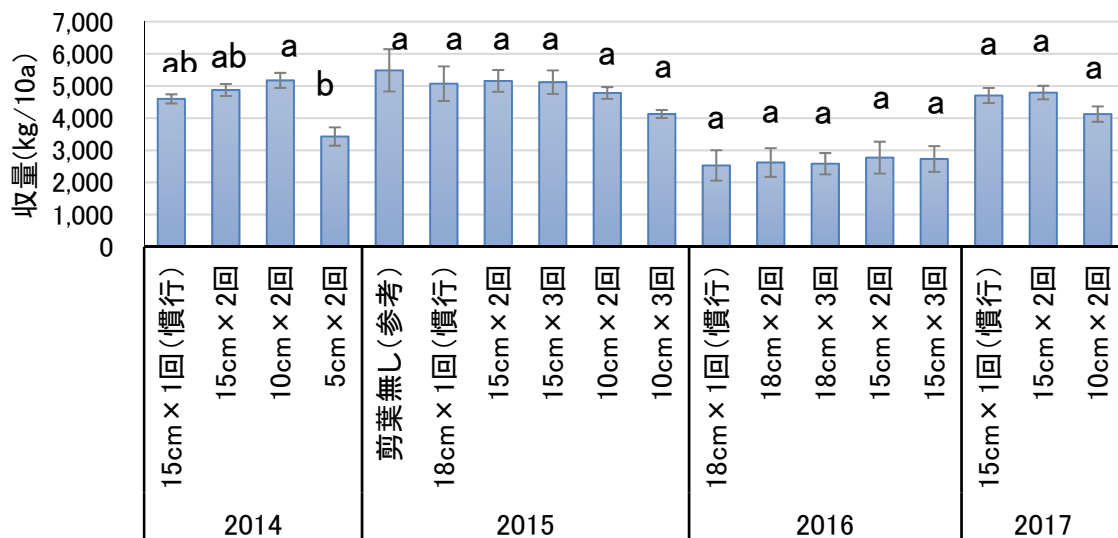


図1 剪葉程度および回数の違いが冬どりタマネギの収量に及ぼす影響(手植え)

2014年および2016年、2017年のデータに付する異なるアルファベット間にはTukey検定により5%水準で有意差があることを示す (n=3)

2015年のデータに付する異なるアルファベット間にはTukey-Kramer検定により5%水準で有意差があることを示す (n=2~3)

図中の縦線は標準誤差を示す (n=3)

2016年は虫害(ヨトウムシ類)により大幅に減収

[ その他 ]

研究課題名: 夏播き冬どりタマネギにおいて5トンどりと2月までの出荷を可能にする栽培技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 2014~2017年度

研究担当者: 浦田貴子、中島正明、中野裕一郎、田中守、志戸瑠梨